

O3-017

牛乳が苦手な未就学児を支援するサペレメソッドを用いたリモート&リアル体験型食育プログラムの開発

河口 八重子、染井 順一郎、菅沼 彰子、坂根 直樹

国立病院機構京都医療センター臨床研究センター

【目的】

牛乳が苦手な未就学児に欧州発の五感を使って食材に親しむ手法「サペレメソッド」が有効な可能性がある。一方、ウィズコロナ/アフターコロナ時代ではオンラインを用いたリモートによる食育が求められている。そこで、牛乳が苦手な未就学児向けのサペレメソッドを用いたリモート&リアル (R & R) 体験型食育プログラムを開発し、その効果を検証する。

【方法】

研究対象者 (未就学児とその保護者) の選択基準は、2-6歳の未就学児で保護者がインターネットでプログラムの視聴が可能、除外基準は牛乳アレルギーとした。チラシやホームページ等で研究対象者を募集した。親子で視聴する25分の体験型食育プログラムは、牧場で子牛が乳を飲む映像、牛乳を五感で楽しむ内容の紙芝居、視聴者に牛乳の五感体験とチーズ作り体験を促すデモンストレーションの3部から構成した。介入前と介入1カ月後に牛乳に対する保護者の意識 (10項目)・行動 (15項目)、家での牛乳摂取回数、園での牛乳摂取回数、乳製品の摂取回数を調査し、介入直後にプログラムに対する評価 (20項目) を調査した。なお、本研究は京都医療センター倫理審査委員会にて承認を得て実施した。

【結果】

52名の応募があり、40名から全ての調査への回答を得た。介入前の家での牛乳摂取状況により、1日1回以上群 (n=10)、1日1回未満群 (n=17)、全く牛乳を飲まない群 (n=13) の3群に分類された。牛乳・乳製品の摂取頻度では、1日1回以上群では有意な変化はみられなかったが、家で牛乳を飲まない群の子どもの約6割 (8/13) が牛乳を飲むようになった。これには保護者の「声かけする重要性」の再認識や「適量で牛乳を提供」、「牛乳の種類を確認」する行動が有意に変化していた。なおプログラムの内容については、牛乳が苦手な児は嗅覚や味覚を使う体験活動では楽しんだ割合が低い傾向にあったが、紙芝居は他の児と同様に楽しく視聴した。

【考察】

開発したプログラムは牛乳が苦手な子どもにも楽しめる内容であり、牛乳の苦手克服に資する有効なプログラムであった。また、子どもが飲むための保護者の方策も明らかとなった。今後は、複数回の取り組みのためのプログラム開発や長期的なフォローアップが必要であると考えられる。

O3-018

幼児の体格に関連する乳幼児健康診査の問診項目の探索

佐々木 溪円¹、杉浦 至郎²、山崎 嘉久²、多田 由紀³、和田 安代⁴、小林 知未⁵、横山 徹爾⁴

¹ 実践女子大学生生活科学部

² あいち小児保健医療総合センター保健センター

³ 東京農業大学応用生物科学部

⁴ 国立保健医療科学院生涯健康研究部

⁵ 武庫川女子大学食物栄養科学部

【目的】

乳幼児健康診査 (以下健診) で得られる身体計測値と問診結果を用いた縦断分析により、幼児の体格に関連する生活習慣を探索すること。

【方法】

愛知県内の9市町で2015年度に出生した児から、同一の市町で3~4か月健診 (4m)、1歳6か月健診 (18m)、3歳健診 (36m) を受診した4697人を抽出した。身長・体重の計測値や問診の回答に欠損がある者を除き、3914人 (男児1953人、女児1961人) を解析対象とした。児の体格はBMIパーセンタイル値 (BMI%) で評価した。各問診項目の選択肢は、保健指導の視点から2水準に区分した。予備解析として、18mと36mにおけるBMI%を従属変数、各問診項目を独立変数、性別および出生時と4mのBMI%を調整変数とした一般化推定方程式による解析を実施した。次に本解析として、18m、36mにおけるBMI%を従属変数、予備解析の検定結果がP<0.1であった問診項目 (「母の喫煙」、「母乳育児」、「朝食欠食」、「甘い菓子の習慣的摂取」、「甘味飲料の習慣的摂取」、「就寝時の母乳摂取」、「親による仕上げ磨き」) を独立変数、性別および出生時と4mのBMI%を調整変数とした一般化推定方程式による解析を実施した。

【結果】

以下に、幼児の体格と関連もしくは関連する傾向がみられた因子を角括弧内に、その因子が得られた健診時期に続けて回帰係数の推定値 (95%信頼区間) を記載する。[母が非喫煙者] (4m: -4.65 (-9.90, 0.60)、P=0.082)、[甘い菓子の習慣的摂取なし] (36m: -1.50 (-2.82, -0.18) P=0.026)、[甘味飲料の習慣的摂取なし] (18m: -2.24 (-3.82, -0.67) P=0.005)、[就寝時の母乳摂取なし] (18m: -3.51 (-5.17, -1.85) P<0.001)、[親による仕上げ磨きあり] (18m: -1.66 (-3.08, -0.23) P=0.023)。

【結論】

幼児の体格は、乳児期の母の喫煙や幼児期の食習慣と保護者による歯科保健行動と関連していた。

本研究は、厚生労働行政推進調査事業費補助金成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業「乳幼児の発育・発達、栄養状態の簡易な評価手法の検討に関する研究」(21DA2001) として行った。